

Title	礫山の言葉 “LOVE IS ART, STRUGGLE IS BEAUTY.”の考察(前編)
Author(s)	喜田, 敬
Citation	聖学院大学論叢, 6: 97-112
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=698
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

碌山の言葉 “LOVE IS ART, STRUGGLE IS BEAUTY.” の考察（前編）

喜 田 敬

Rokuzan's “Love is Art, Struggle is Beauty” (Part I)

Kei KIDA

“Love is Art, Struggle is Beauty.” This remark was left in Rokuzan's (Ogiwara Morie's) notebook as his own observation. One year after his death, this writing was discovered in his literary remains, called “Chohkokushinzui,” which published on April 20, in 1911. Thereafter, this remark became widely known.

It is not too much to say that the masterpiece in modern Meiji sculpture “Onno” (a National Cultural Treasure) was an excellent model taken from this writing, and this masterpiece “Onno” conceivably was the expression of his dear one Sohma Kokkoh's (Ryo's) face. Therefore, sometimes “Love is Art, Struggle is Beauty.” was a comment with a romantic image.

However, what was Rokuzan's real intention in his writing? This thesis is a consideration of Rokuzan's English writing as conceivably his motto and/or the core of his ideology, treading in his steps of his faith and his art.

序

碌山（萩原守衛）のノートに書き残された LOVE IS ART, STRUGGLE IS BEAUTY は、彼の死の一年後、1911年（明治44年）4月20日発行の碌山遺稿集『彫刻真髓』に活字となって登場し、以後多くの人々の知るところとなった。

明治近代彫刻の最高傑作「女」（国の重要文化財）は、この言葉を見事に造形化した作品といわれている。また、この碌山の「女」は、彼の思い人新宿中村屋の女主人、相馬黒光（良）の面影を写した作品として、ともすると、LOVE IS ART, STRUGGLE IS BEAUTY は、ロマンティックなイメージで語られることもあった。

Key words; English, Christianity, Meiji Era, Struggle, What is Art, Idea and Craftmanship, War

しかし、碌山の真意は如何なるものであったであろう。本論は、彫刻家碌山の信仰と芸術の歩みをたどりつつ、この碌山の座右の銘とも思想の中核ともいわれる英文に対し考察を試みるものであり、その前編である。

第1章 英語であること

仁科悖は、「碌山が自らの「思想」を英語で表現したのは、やはり日本語では尽せないものを感じたからであろう。love といい art といい, struggle といい beauty という。当時の日本にあってはまだなじまない、未熟の意味内容をもっている。」⁽¹⁾という。

碌山に限らず、従来の日本語になじまない外来語は、片仮名やアルファベットのまま表記されて来た。当時 love という用語は、北村透谷の影響であろう、若者の間では盛んに用いられていた。但し、これは透谷の意に反して、一般には男女の恋愛を意味し、そしてこれは今日にまで至っているといえよう。外来語のままでも、異文化にあっては本来の意味は変化するのである。

言葉の違いは、文化の違いである。art, 芸術は、正に文化そのものであり、両文化が異なる限り、art と芸術の思想的背景もまた異なっていると言えよう。

“Love is Art, Struggle is Beauty.”を、笹村草家人は「愛は芸術にして懊悩は美也」⁽²⁾と訳した。仁科悖は、「愛は芸術なり、相克は美なり」⁽³⁾という。林文雄は、“Struggle is Beauty”を「葛藤こそ美である」⁽⁴⁾と訳した。そして、碌山美術館および南安曇教育会関係刊行物は共に、「愛は芸術なり 悶えは美なり」⁽⁵⁾という訳を用いている。これらの何れが最も正しい英文和訳であかは問題ではない。訳文の相違は、各研究者・グループの碌山研究の結果であり、それぞれの碌山観がここにある。黒光は、碌山の struggle を回想を込めて「煩悶」⁽⁶⁾といった。「懊悩」、「相克」、「葛藤」、「悶え」、そして「煩悶」。碌山の struggle とは如何なるものであったのであろうか。

興味深いのは、碌山の日常会話にも、英語が登場する事である。ニューヨーク留学中知り合い、碌山の生涯の友となった戸張孤雁は、「帰朝以来一週に少なくとも一度は逢ふて居た」⁽⁷⁾仲であったが、互いを訪問する時の碌山の挨拶は、「ホワツト マター ウイズ ユー」⁽⁸⁾とか「ヘエー、ヘエー、ゴツデム ホワツトマタ、ウイズユー」⁽⁹⁾であったという。少々乱暴な挨拶であるが、このゴツデムを戸張は、ニューヨーク留学中の碌山の「無邪気は有名で全ての人々からオギヤラー又はミスター、ゴツデムと呼ばれて可愛がられて居た、ゴツデムは此の言葉の乱用から誰れ命ずるとなく何時か一つのニックネームになつたのである、・・・ゴツデムの名は他校にまで有名なものであった」⁽¹⁰⁾と回想した。碌山は、帰国後もアトリエで制作が「思うやうに出来ぬ事でもあるとゴツデムと云つて、さも残念さうに」⁽¹¹⁾したという。日本でも碌山の口癖となったのである。

1910年（明治43年）4月22日、碌山は、新宿中村屋において、数え年32歳の若さでこの世を去っ

た。4月20日に、中村屋を訪れていた碌山は、夕刻になって様子がおかしくなった。相馬夫妻は、碌山に泊ることをすすめたが、その時愛する黒光に向かって言った碌山の言葉は、“Let me go home, it is better for me, mother”¹²という悲しいものであった。そして、彼は血を吐き倒れた。

碌山は他にも多くの英語の言葉を残しているが、ここでそれらを列記することは避ける。但、それらの多くは、大切な人達に対してであり、大切な内容の言葉であった。

今日、多くの帰国者は、不意に口を突いて外国語が飛び出さないかと神経を使う。外国気触れとされることへの恐れなのだが、これは、第二次世界大戦中の敵性語禁止を体験した日本社会に、今も残存する空気といえよう。明治はまだ、その体験をしていない時代であった。

戸張は更に、「多くの人は帰朝すると留學中と氣風が異なるものである、荻原君は四十一年三月帰って来たので私は直ぐと尋ねた・・・挨拶が済むと最先に少しも変らなかつたねー、と私が云うたら、君も善く変らなかつたねー、と答へた然かし日本では夫では損だ、でも変わらずに通し度いと守衛君は云ひたした、其の言の如く君は終りまで変らなかつた。」¹³と書き記している。ここにも、自分自身で存り継げようとする碌山の struggle があつたといえよう。

第2章 井口喜源治との出会い

1879年（明治12年）12月1日、碌山は、長野県南安曇郡東穂高村に、農家の五男として生まれた。幼少期より体は弱かつたが、「小學校の學科は総て優等で常に一番、若し落ちてても二三番であつた。尤も出来た學科は圍畫算術作文體操であつて、品行は常に甲であつた。」¹⁴という。1893年（明治26年）、東穂高組合高等小學校を卒業した。この年、戸張の言う、碌山「を彼岸に嚮導する先進者——教育者・・・俗世間に何等の評知もない、無名の一隱君子、井口喜源治」¹⁵と出会つたのである。井口は、1893年（明治26年）10月1日、碌山の卒業校（小學校）に准訓導として赴任したが、1898年11月には、東穂高禁酒会が「矢原に眇たる一私塾の『研成義塾』を興して、只一人ぎりの教員とな」¹⁶つた。碌山にとって、井口との出会いは、キリスト教との出会いでもあつた。以後、この「俗世間に何等の評知もない」クリスチャン教育者は、碌山の生涯の師となり友となつたのである。この井口の筆となる「碌山荻原守衛君」には、「明治二十九年の五月に彼は不図心臓病に罹つた凡そ一年半の間彼は藥餌と親しんで居つた農業は出来ず父は農業の傍蓮花草の種の商をして居たから彼には将来其商の方を譲るつもりであつた」¹⁷とある。1896年、碌山17歳の年のことであつた。勤勉で労働を神聖視する碌山にとって、「農業は出来ず」不安な日々が過ぎていった。何より、役に立たない自分が悲しく、一家の負担と成ることが耐えられないと思つた。父は、愛する息子の将来をも考へていた。しかし、肉体に一つの棘を持つことが、碌山をさらにキリスト教へと近づける結果となつた。軽い作業、読書、井口との交流、碌山は、永遠の生命を見詰めつつ時間は静かに流れていった。碌山の心臓病は完治せず、以後、生涯の持病となつたのである。

井口はつづけて、「明治三十二年二月彼は友人丸山（文一郎）及余と共に上京して名士を訪問し始めて巖本善治、松村介石、植村正久、海老名弾正等の諸氏に面会した、それで彼は大なる刺戟を受くと同時に自分も何か一つやってみたいものであるとの考が頻りに動いて帰郷」¹⁸したと記している。この碌山最初の東京旅行の目的は、敬愛する井口と友人丸山と共に、当時のプロテスタント・キリスト教界のリーダー達を訪問することにあつたが、この訪問を機に、碌山は自分の将来を考えはじめる。碌山等は、2月24日帰郷したが、1899年（明治32年）、碌山20歳の日記「つくまのなべ」には、「二月二十七日」聖書を少し読み初む。¹⁹とある。以後この年に限って言えば、9月18日まで、聖書を読む事は、碌山にとってほぼ日課となっている。この年の夏、碌山の心臓病は、再発していた。

さて、碌山の郷里には、もう一人碌山に影響を与えたキリスト者がいた。東穂高禁酒会の設立者にして、後の新宿中村屋主人、相馬愛蔵である。1897年（明治30年）3月19日、相馬愛蔵は、東京牛込払方町教会にて、明治女学校を卒業したばかりの星良（黒光）と結婚し、穂高へ帰って新婚生活を始めた。黒光の嫁入り道具の中には、一枚の油彩画、長尾奎太郎作「亀井戸風景」があつた。相馬家で、この油彩画を目にした碌山は、しだいに西洋画に心を引かれるようになる。黒光は、「秋になると眞赤に紅葉する何の木か大きな木に倚りかかつて土蔵の方を向いてスケッチなどしてゐたもので、それはたしか明治卅一二年の頃かと思はれます。その内碌山も上京して繪をやるやうになりました。」²⁰と記している。「自分も何か一つやつて見たい」、碌山は、繪をやってみようと考えたのであつた。

第3章 二つの学校

1899年（明治32年）10月、上京した碌山は、10月22日、黒光の卒業校明治女学校校長巖本善治に面会した。この面会中、絵画教師を誰にするかの相談もなされている。以下は同日の日記の一部である。「三時、巖本先生を訪ふて、井口望月両先生の書を呈し、生が将来を託す。・・・洋画家の当時の第一流と目せらる人は旧派に小山・浅井、新派に黒田・河村のこの四人とす。然して師として学ばんとするこは、後二人は一は不品行極まり、一は一くせありて宣しからず。前者もあまり好める人物ならずと。松井氏は極めて温好の人、決して名を求めず、依て第一流には出でざるも手腕決して二流に下らず。人物に於て温厚、一点の申分なし。依て同氏に付きて学ぶをよしとす。」²¹。注目すべきは、教育者の条件として、一流である以上に品性を問うている点である。そして、この時代の洋画壇の重鎮、黒田清輝²²を人選から外し、明治女学校の絵画教師松井昇を「よしと」したのであつた。巖本、松井、そして長尾奎太郎のアドバイスもあり、碌山は結局小山正太郎の画塾「不同舎」²³への入塾を決めた。また、巖本の碌山に対する信頼は大きく、当時巢鴨にあつた²⁴明治女学校内の処静庵²⁵に住むことも許されたのである。

碌山の不同舎入塾は、同年11月5日²⁶⁾であったが、11月10日付、井口宛書簡には、「全く独学同様の義に候。先生は一日一回位廻り来り、かれこれ云ふのみ、外は先輩に聞き聞きやると申す次第。小生は鉛筆画は全く初めての位故、更に不出来、手本は中々むづかしい。」²⁷⁾とある。別に、不同舎には個性重視の自由な塾風があった訳ではなかろう。小山は1898年（明治31年）、東京高等師範学校講師²⁸⁾に就任し、不同舎に力を注ぐことが困難になったのである。本々小山は、洋画教育の先駆者的存在であったが、新古典主義者であり、アカデミックな教育法をとった彼は、すでに旧派と目されていた。碌山は、「鉛筆画は全く初めて」であり、狼狽の様子が分かるが、「手本は中々むづかしい」とは、旧式な模写教育の事であろう。

同書簡は、さらに「画界の内部も一日通し候へ共、如何せん斯界にも清輩無え、金の為の職業に過ぎず、腐敗の様も見へあつけにとられ、いやに相成申候。寄り来る奴等は皆俗物」²⁹⁾と報じている。絵画によって立とうと、志を立て上京した碌山の観察眼は、鋭く画界の現実を見ぬいた。失望はしたものの、碌山は別に struggle はしなかった。彼は、「にこにこしながら卑俗を無視した。」³⁰⁾のである。

碌山の救いは、明治女学校にあった。「彼は間もなく同校庭内の林中に三畳半の家を造ってそれに入り之を深山軒と名付け、基督教を巖本氏の外新井奥濠氏英語を青柳有美氏に學んだ」³¹⁾。1900年（明治33年）5月より深山軒に住み移った碌山は、7月13日、井口宛に次のような書簡を送っている。「先生よ、我はかかる楽しき境遇にあるを得しは誰が為ぞ。されど之と同時に□を忘れ、我は全く俗化しつつあるなきを畏る。」³²⁾

不同舎での絵画修業に行き詰りも疑問も感じていた碌山ではあったが、明治女学校内に住み、敬愛する巖本をはじめとする教師達との交わりや、若き才媛、エリート女学生との交流は、「楽しき境遇」であった。しかし、碌山は、この境遇によって struggle を忘れ、俗化して行く自分を恐れたのである。西洋画なら西洋へ行って学ぼう。碌山は、その解決を太平洋の彼方に求めたのであった。1908年（明治41年）、米仏留学から帰った碌山は、留学の動機について「こちらに居てはあまり順境に在ったので、こんな事でぐずぐずして居たらのらくら者になるより外はない。若い中は求めても苦勞をせにやと云ふやうな所から、最初まづアメリカへ行ったのです。」³³⁾と言った。碌山は struggle を回避する為に留学を決意したのではない。自を成長させて呉れる struggle を求めて留学を決意したのであった。「順境」が人を墮落させるという考え方は、碌山生涯のものとなった。

さて、1899年（明治32年）10月22日、碌山が上京してすぐ巖本に面会したその日は、日曜日であった。前掲の「守衛の日誌」には、次のようにある。「相馬兄と麴町一番町教會に植村正久先生の説教を聞きに行く。題ヨハネ傳中『人新しく生れずんば天国に行くを得ず。』なる一節。

先づ、道德と宗教の区別を説いてから、曰く、「道德とは地のもの、宗教は天のもの、道德とは人の定めし法に能くかなひ、之れに背かざらんことを務むるにあり。宗教は之れと異なり、己れに他人以上の偉大なるものを信じ、之を愛し之を敬し、之に己を依頼し、即ち想、地にあらず偉大な

る神にあり。」と。更に進んで、先は謂ふ、「偉大の神とは多くの人の云ふ極理窟ッポイ萬物を支配する大法の何のと云ふとは少しく異なり、我主イエスの愛せる神、主イエスを降せる神、この神を愛し敬し信ずる事、之れ即ち新しく生れしなり。」と尚信仰の薄弱變動を人生の恋に例へられ、「青年時代の浮華の恋に依て結ばれし夫婦間の種々なる冷熱を経ずんば、真の夫婦の愛情に達せざるが如く、神と結べる契約も種々の辛酸を経ば、或は冷え或は薄らぎ甚だしきは離縁ともなり、或は辛苦争に打勝ち、遂には神と楽しく真の愛情を結ぶ。希望は諸子先その域に達せよ。」と。

先生の説を聞いてわれのうたがひ一、道徳と云へば必ずしも人の定めし法のみならず所謂道なる言葉の中には、言ひあらはせざる自然の大法の導きによるとの意味ある事。二、神とは自然の大法、天地の靈氣と異なれりとの説なり。あゝ吾未だ宗教に付き研究浅く、以上の意を解する不能、悲しき或。信仰に関する説の如きは極めて卓論に相違なければ、以上の疑の明かならん事は尚明月を見るが如からんものを。(帰りて一時之を認む)³⁴⁾。これはあくまで礫山の筆記による植村説教であり、内容には多少の違いはあろう。しかし、礫山が、「聖書」を読みはじめたのが、この年の2月27日だとすると、求道者礫山の説教に対する集中は、驚くべきものと言わざるをえない。しかも、「帰りて一時之を認む」とある。植村の説教中、礫山には心に引っ掛かるものがあった。①道徳と宗教の違い。②神とは如何なる存在か。であった。疑問はあったが、植村に反感を持ったのではない。自分には分からなかったが、「信仰に関する説の如きは極めて卓論に相違な」と考えた礫山は、この日面会した巖本に、これらの事柄について質問しているが、巖本は即答を避け、「又ユックリと充分御訓示下さるとの事。」³⁵⁾になった。そして、巖本は、10月29日、礫山との約束をはたしている³⁶⁾。

礫山は、植村の説教を「卓論に相違な」と考えて、これを書いた。疑問点をメモしただけではない。注目すべきは、「信仰の薄弱變動を人生の恋に例へ」た、③信仰生活の在り方についてである。①、②、③、どれも彼には重要に思えたが、ただこの③について礫山は、「うたがひ」を抱いていないのである。植村の言う「神と楽しく真の愛情を結ぶ。」ための「辛苦争に打勝」つ生き方に、礫山は、異論は無かったと言えよう。礫山の信仰にも「冷熱」はあった。しかし、礫山は「辛苦争に打勝」つ為の struggle をその都度重ねて行ったのである。

第4章 礫山の受洗

1901年（明治34年）2月27日、留学を前に、礫山は洗礼を受けている。3月7日付の井口宛書簡には、「愚弟去月二七日受洗仕候間之れ又御喜び被下度候。」³⁷⁾とある。また、郷里の長兄萩原十重十には、3月8日付で、「去る月廿七日、先生の御教へに従ひ基督教信徒たる正式洗礼を授り申候間、右御祝被下度候。此時も萩原の誕生日とて御祝の御馳走に預り候段、よろしく御礼言被下度候。」³⁸⁾と書き送っている。

碌山の受洗について、今だに明らかでない点が二つある。一つは碌山の受洗教会であり、他の一つは、碌山の洗礼司式者が誰か、という二点である。十重十宛書簡中、「先生」とあるのは、巖本のことであり、巖本が碌山を導き、受洗をすすめた事は分かる。この点を重視したのであろうか、笹村草家人は、「明治女学校での洗礼」³⁹⁾と考へた。しかし、何故碌山は、二通の書簡共に、教会名、司式者名を記さなかつたのであろうか。これも、碌山研究の今後の課題である。巖本は、教へ導いた碌山の受洗を喜こんだのだらう、「此時も」碌山の受洗を、新しい「誕生日」として祝つて呉れた。そして、碌山は、十重十からも、御礼を言つて呉れるよう頼んだのである。碌山の受洗の事実については、確かだといえよう。

碌山のキリスト教について、留学中に友人となつた高村光太郎は「荻原守衛はクリスチャンではなかつたやうだが、クリスチャン的宗教心がつよく、信念の固い人物のやうにその頃でも見うけられた。紐育あたりによくごろごろしてゐた日本人のいはゆる浪人たちのやうにだらしの無い人間ではないので、私も彼に心をひかれてゐた。」⁴⁰⁾という。光太郎にとって、碌山は生涯忘れられない人物となつた。そして、「信念の固い人物」碌山の背景に光太郎は強く、「クリスチャン的宗教心」を觀たのであつた。しかし、光太郎は碌山は「クリスチャンではなかつたやうだ」と考へた。これは何を意味するのか。言葉通りなら、碌山は、光太郎に、自分がクリスチャンであることを話さなかつたか、話す機会が無かつたということになる。

黒光は、「碌山がクリスチャンらしかつたのは研成義塾時代だけで歸朝後そういふ處はありませんでした。……主人はキリスト教に入つてゐましたが、その頃私はぬけてゐました。」⁴¹⁾という。研成義塾時代は、碌山の上京以前であり、碌山は、クリスチャンではない。また「クリスチャンらしかつた」とは、まさに黒光らしい言い方である。

黒光は、小学校を卒業すると、「明治女学校への憧れを抑へて宮城女学校に入學」⁴²⁾した。しかし、黒光の言う「アメリカからお金が夾て經營されて」⁴³⁾いた同校の、「日本人を日本の傳統を無視して教育する」⁴⁴⁾姿勢に反感を持ち退學してしまう。1892年（明治25年）、情緒不安定な少女期の事ではあるが、この頃から、黒光の深層には、アメリカ人に対する嫌惡の念が芽生え始めていたと考へられる。1944年（昭和19年）、戦時下とはいえ、黒光はその著書『穂高高原』のあとがきを、「いざ米英撃滅の聖戦下、大東亞興隆の母胎としての戦ひに、中村屋も晴れの御召の下るを待つ。おほよそ聖戦の力と參ずることを得るならば、何の部門を問ふ要があらう。謹んで命を待ち、彈丸もつくらう、刃も磨がう、嘗てふるさとを後にした我等、遂にこゝに至る。穂高明神も照覽あれ。」⁴⁵⁾と結ぶ心境に至つたのであつた。黒光69歳の春のことである。

宮城女学校を退いた黒光は、フェリス女学校へ入學した。同校では「音樂の教師ミス モルトンから……ニコライの禮拜の」⁴⁶⁾話しを聞いて、今度はロシア正教の禮拜に出席してみた。「はじめてニコライの會堂に入つて私のそこに觀ましたものは莊嚴この上もない禮拜の姿、ほんたうに息も詰まるやうな宗教の絶對境、……ニコライ大司教は其中で……金の十字架のある壇上に上つ

て祈る、その祈りの聲に私は天上の聲をきく思ひがしました。式が終って『小西増太郎さんの説教があります』といふと、私は恐いものゝやうにして會堂を逃げだしました。説教は、もう懲りへ、私は説教以上のものを渴求めてゐるのでありましたもの』⁴⁷⁾。その後、黒光は、フェリス女学校から、念願の明治女学校へと転校した。

黒光の信仰には、多分に雰圍氣的なところがあり、また日本的甘えもあった。結局自立することなく、キリスト教から離れていった。自己で存り続けようとする碌山を、黒光に、どれだけ理解出来たか、疑問は残る。

笹村は、光太郎、黒光の回想を踏まえてか、「碌山にとって基督教は思想ではあっても宗教ではなかった、と云ふのが二十代の彼には信仰に蹈入るほどの内面の斷層は生じてゐなかつたからで、渡米前に洗禮など受けたと云つたやうな外形だけのものは歸朝の後には殆ど脱落してゐたやうである。不如意の海外生活に處してプロテスタントイズムは思想として自律の強い力を與へて彼を崩さない支へにはなつたし、これは終生に及んでゐる。」⁴⁸⁾と結論した。笹村のいう「宗教」とは、如何なるものことであろう。日本の宗教観をもってすれば、プロテスタント信仰を宗教として理解することには、困難がある。笹村の結論は性急に過ぎるのではないか。

留意すべきは、日本プロテスタント・キリスト教史における明治という時代にある。この日本プロテスタント神学の黎明期には、三位一体の神についても、「聖靈論」はもとより、「キリスト論」さえも、明確とは言い難い時代であり、父なる神が如何なる神かが中心命題となつていた「神論」の時代であつたと云えよう。

また、アニミズムの宗教観、汎自然主義的自然観、そして神権天皇制と国家神道の創出したこの時代、日本における伝道は並み大抵なものではなかつた。伝道者も信徒も、内面的戦いと共に、外的圧力に対しても戦つた時代である。

1901年（明治34年）3月13日、碌山は横浜を發ち、4月5日、ニューヨークへ着いた。碌山の留学は、私費留学であり、アメリカへ着いてまず必要となつた事は、職捜しであつた。まだ英語も不自由であつた碌山は、多くの仕事に失敗している。ここでも、それらを例記することは避けるが、ニューヨーク上陸からの約6ヶ月の間、彼の生活は、半ば放浪の旅であつた。この頃、碌山は画学校を断念し、神学校へ入学しようか考え、迷ひ始める。しかし、それを思い止まらせる人物がいた。明治女学校の学生、片岡富子である。1901年（明治34年）井口宛（9月から10月頃）の書簡には、「片岡富子とは岡山の女にて予の最親友なり。彼女は予の迷乱と煩悶とを叱し是非共画に依て立つべしと匆々申したり。赤心我を動かし弟眠らざるも数夜、深く思ふ所ありて去る七日断然（Art Students League of N. Y.）に入会十弗の月謝を払ふて通学いたす事と相成候」⁴⁹⁾とある。

1901年（明治34年）10月1日、碌山は、フェアチャイルド家の学撲となつた。同家は、アメリカの善良なる富豪の一家でかり、これは碌山にとって、幸運であつたといえよう。アメリカで学び、

働きながら、碌山は、フランス留学の為の学費を蓄わえた。そして1903年（明治36年）10月、フランスへと旅立ったのであった。

第5章 What is Art

碌山の第一次フランス留学は、1903年から1904年5月までであった。この5月、碌山はパリのサロンでオーギュスト・ロダンの作品「考える人」を見、「始めて藝術の威厳に打たれ、美の神聖なるを覚知して茲に彫刻家とならうと決心した」⁶⁰のであった。

帰米後、Art Student's League of N. Y. へ戻った碌山は、人体画と解剖学の猛勉強を始めた。目的は、再渡仏して彫刻を学ぶ為の基礎づくりである。そして、この頃から碌山は、“What is Art?”と口癖を言い始めたのである。興味深いのは、これが絵画をはじめた頃のことではなく、「美の神聖なるを覚知し」てからのことである点にある。

1904年（明治37年）12月、碌山の井口宛書簡には次のようにある。「只一心不乱に、何でも一事が能くアンダースタンドすれば万事融然として了解し得べしと存じ、僕は僕の本業に依而人生を解釈せんと決心致し、日夜人体の構造と如何にして之を描き出さんかと専心致居候。」⁶¹。碌山の人生の目的は、著名なアーティストになることでなく、アートに徹して、人生の何んたるかを了解することにあったと云えよう。

碌山のLOVE IS ART, STRUGGLE IS BEAUTYを1956年（昭和31年）3月発行の『彫刻家萩原碌山』の別章藝術論（277頁）は、作家言として「Art is love, struggle is beauty.（註—藝術は愛也、争闘は美也と譯しうるが相馬黒光によればStruggleは煩悶の意と云ふ）」と記載している。いつの間にか、“Love”と“Art”の位置が変えられている。ミスプリントでは無い。碌山の問うた、“What is Art?”の答えを、この研究グループが、ここに見い出したと考えたからであろう。しかし、これではまるで遺言状の書き換えである。碌山は“Art is Love”とは言わなかった。アートは愛ではない。愛がアートなのである。

アメリカにおいて、碌山の問いつづけた、“What is Art”は、帰国後の1909年（明治42年）11月、『公設展覧會評』に、彼の答えとなって登場した。「アートは単に努力ではない、単に勉強ではない、勿論アートは展覧會の為めのアートではない、場当て、ヤマカンでは尚更ない、アートは単にアートである、アートをアートとして了解した作家、藝術丈けが僕の眼を曳く、満足を与へてくれる趣味、感興、慰安を与へてくれる。」⁶²。彼の答えとは、“Art is simply Art.”ということである。

英語のartは、名詞である他に、古英語のbe動詞、第二人称、単数、現在である。ただし、名詞artの語源がラテン語のarsにあるとすれば、be動詞art（語源は古代スカンジナビア語）との

言語学的関連は無いと云えよう。

しかしながら、art の特性の中に、この be 動詞的なものが多分に見られることは不思議でならない。碌山はよく努力し、よく勉強した。彼の訓練と観察は、「明鏡の心で対象を寫す、対象の形ではない内部生命を寫し取る」⁶³ことであった。そして、「彫刻の本旨即ち中心題目は一製作に依て一種内的な力（Inner power）の表現さるゝことである。生命（Life）の表現さるゝことである」⁶⁴ことを学びとった。しかし、碌山の言う「アートは単に努力ではない、単に勉強ではない」とは、努力と勉強の方法について言ったのであろうか。そうではなく「明鏡の心」で制作に没頭していると、作品が向う側から現われて来る体験について言ったのではないか。アートの主語が第二人称の体験である。作者が、如何なる考えを持っていようとも、自己の内面が意識を超えて出現する体験である。碌山は、「作者の人格は作品の上から、ドウしても隠すことは出来」⁶⁵ない、ことを知った。そして「人格を透して表現する、それより外にはない」⁶⁶と考えた。さらに、「美術品の批評は即ち作者の人格の批評である」⁶⁷と結論した。碌山にとって、品性、人格は、人物評価の重要な規準であったが、向う側から現われて来るものは、人格だけではない。思想、信仰、その他人間の内面に存在するものは、この人格と共に出現するのである。

さて、日本近代彫刻の父碌山に関する興味深い証言がある。第二次フランス留学（1906年10月～1908年12月）中、友人となった本多功⁶⁸は、「大體碌山は無器用ですからモデルがないと何も禄にできなかったものです。我々はその頃よくパンを一つまみ指でねって鼠や猫など作ったりしましたが、そんな事も碌山は一向下手でした。」⁶⁹と回想した。黒光もまた、「よく家の子供らにオヂサン繪をかいてくれとせがまれて駄目だよと云ひ乍ら、かいた汽車や電車の繪などはまづいものでした。」⁶⁰と言う。碌山は「無器用」であったが、この事が、碌山に幸いしたといえよう。画家、彫刻家の中には、幼少期より器用な者が多い。また、初等教育における図画工作の指導方法に我々は大きく影響される。「上手」「下手」が基準となっていると益々、技芸的な絵を好むようになり、アートが深遠なる内面の世界であるなど思いもおよばなくなる。碌山は、「其技藝が、上手であるかといふことにさへ注意すれば、其品性の如きは何でも構はぬといふやうに、心掛けてをる人もある」⁶¹と言い、これを「工藝的労働者」⁶²と呼んだ。自らの技芸だけに頼った作品は、もはや、“art”ではなく、主語が第一人称の“am”といえよう。そして、その作家は、artistではなく、picture maker となる。そして碌山は、「スタデーの接続、印象の連続でいゝぢやないか。畫を作るなどは尤も不忠實と云はねばならぬ。」⁶³と言った。若き日のパブロ・ピカソは、自分の器用さに悩んだ末、Loose Control を目的に、両手でデッサンの勉強をしたと云われる。

犀水生は、碌山について「多くの藝術家は地位を作る為に洋行をして、帰朝後は銅像やなにかに手を出して金儲にあせるのが普通であるのに、荻原君の洋行は眞に藝術の為であった、全るで金儲などに手を出さなかった。」⁶⁴と記している。技芸に長ずると、ある種の誘惑におそわれる。技術と

経験によって人の喜ばせ方，トリックが身についてしまうのである。これも，“art”ではなく，主語が，第三人称である“is”といえよう。

次に，be 動詞 art が，現在形であることに注目しよう。「現時点で人類の最古の芸術行為として明確にさかのぼりうるのは・・・今から3，4万年前頃までである。」⁶⁵。最初に発見された，この時代の作品は，「1879年，北スペインのアルタミラ」⁶⁶洞窟の壁画であった。1880年のリスボン「人類学先史考古学国際会議では発見者の推測は全面的に否定されてしまった。」⁶⁷。作品が鮮明で，生き生きしており，対象となっている動物の姿が正確に捕えられている為，現代人による贋作という結論が出たのである。旧石器時代は，狩猟採集の時代であり，当時の人々にとって，狩猟の成功失敗は，生命の問題であった。数万年もの間，人類の祖先達は，この最大の関心事，動物を見つめ続けて来た。生き生きと描かれた動物の姿は，この観察の成果であり，壁画を描くことは，狩猟成功の祈願であり，祈りであった。先史時代の作品も，中世の作品も，近世の作品も，今日見て心が動かされるのがアートといえよう。文明の力である工業製品は，時間とともにその機能を低下させて過去の物となる。しかし，文化の力であるアート作品は時間を超えて新しい。art は were でもなく，was でもない。ひたすら art なのである。

さて，礫山が師と仰いだロダンであるが，彼はその生涯，到底一人の作家が制作するには不可能と思われる数の作品を残している。実は，「ロダンの助手・・・たちに，自分の作った原型をあたえて，安心してまかせきりで彫らせた」⁶⁸のであった。そして完成すると，ロダンの名が彫り込まれ発表された。この時代の日本では，「鋳物師が実権を握って，その下に原型師がいた時代」⁶⁹であったという。ここにも，当時のフランスのアートと，日本の芸術の違いがある。前者においては，アイデアが何よりも重視され，後者においては，何よりもまず技能，技巧による出来栄が重視されていたのであり，工芸が芸術を従えていた時代といえよう。

第6章 肉の剣と霊の剣

1904年（明治37年）2月，日露戦争は始まった。以後ポーツマス講和条約調印の行なはれた1905年（明治38年）9月までの間，礫山書簡の中には，この戦いについての内容が目立って来る。1904年（明治37年）2月11日のパリ発井口宛書簡には，「日本フリート大勝の報，昨朝満都に^{マア}霊喧たりしが，引つゞき人心騒然たる様なり。」⁷⁰とある。これが最初のこの戦争に関する書簡である。4月6日には，十重十に宛書簡の書き出しに，「戦争も益々前進好都合の様にて邦家の為め嬉ばしき事に存候。」⁷¹と記した。さらに，4月15日井口宛書簡には，「昨今露海軍大失態の報盛に伝はり中々愉快に御座候。」⁷²とある。望郷の思いもあったろう，国際都市パリにあって同盟国イギリスをはじ

めとする各国の対応を見つつ、遠い祖国の勝利を喜ぶ碌山であった。5月になると、碌山はパリを離れ、5月30日にフィラデルフィアに着いた。この年の夏を、フェアチャイルド家とともに、ニューポートで過ごした碌山は、この間トルストイの非戦論⁷³を読んだ。

9月20日（頃）の十重十宛書簡は、「敵の敗を聞いて喜ばんか、それはあまりに残酷ならずや。彼等も亦人の子なずや。」⁷⁴と論調が一変する。同年の蔵書扉書き入れにも、“LETTER AND MISCELLANIES OF ROBERT”には「天長の佳節、紐育に於て求え、・・・敵と云ひ味方と云ふ、人類の上に何等の差ぞ、神の前に何等の別ぞや。」⁷⁵とあり“SELECTIONS FROM WORD-WORTH”には、「敵の敗を聞きて笑はんか、楽しまんか、そはあまりに残酷なるをや。露軍遼陽に大敗し、彼我死者六万を算す。嗚呼彼れも亦人の子ならずや、」⁷⁶とある。

年明けて、1905年（明治38年）（2月～3月頃）の十重十宛書簡では、「剣の戦は満州に勝ててより「日本」の名を世界の片隅まで播布せられ、二才の幼童尚ジャパンを叫び候程にて吾輩在外の徒にも誠に光榮の至に御座候。同胞幾万の血はよく此の名誉を至せり。・・・去る紀元節にはコロンピヤ大学日本人倶楽部の発起にて祝賀会あり甚だ盛会。来会者の過半は外国人なりしにても、日本が如何に列国の間に歓迎せられつゝあるかを知るべく候。」⁷⁷と、ニューヨークにおける日露戦の反響を伝えている。碌山の時代は言うまでもなく、列強支配の世界であった。前年9月より、非戦論を展開して来た碌山ではあったが、親日のニューヨーク社会にあって、極東の弱小祖国日本におくられる声援に対して、喜びは隠せなかった様である。ただ、碌山の非戦主義は終始変わることはなかった。同書簡は、「^{フイバー}疫病にて村海サン、柏井園先生、河井など云ふユニオン神学校の友病床にあり、当時非常に多忙一寸失礼します。」⁷⁸という文面で結ばれている。ここから、碌山のニューヨークにおける交友関係が、画学生に留まらず、神学生、神学研究者にまで及んでいることが分かる。当時の神学留学生も、過酷な生活下にあったであろう。弱っている者を見捨てておけないのは碌山の気性でもあるが、健康を害し病床にある友のために忙しくしていた碌山の姿が窺われる。これらの神学生との交流が、碌山の信仰を深めていたのではなかろうか。また、どの様にして、これらの神学生を知るようになったのであろうか。そして、1901年（明治34年）4月5日からの半年間の苦悩の生活の中で考えた献身。碌山は、ユニオン神学校への入学は、考えたであろうか。

さて、碌山の非戦論の中で特に重要と思われるものは、1905年（明治38年）3月20日付 井口書簡の中の一文にある。「予輩は主基督に於て全然戦争の非なるを知る。彼の霊能を以てしてユダの奸謀を知らざらんや、パリサイの軍兵の如きその一指を動かさずして全滅する何ぞ難からんや、彼をしてマホメットの如く剣を以て立たしめば、優に世界を統一する又易々たり一なるべし。然るを彼は其のペテロが従者の耳を削りたるをさへ之を叱し、之を療したるにあらずや。而して従容として縛に付き、あらゆる辱を受け遂に十字架上に一度彼れは斃れたりき。彼の理想の高遠なる到底予輩人類の容易に之を解する不能、彼れ降りてより二千年最近の人智もまだ肉の戦争を避くる不能、而して彼れの降し玉へる霊の剣と霊の戦争とは、之れを忘却し去れるが如し。又悲からずとせん

や。』⁷⁹⁾。

碌山は、ユニオン神学校の友人達と日露戦について語り合ったのであろうか、詳細は判らない。ただ、聖書を読みかえたのであろう。まず碌山の非戦主義が「主基督」によることが明記されている。

碌山は、福音書中のキリストのゲツセマネの園からゴルゴタの十字架の死までの記述⁸⁰⁾に注目した。「ペテロが従者の耳を削りたる」は、まことに人類の目から見れば正義と云えよう。しかし、キリストは彼を叱る。神の計画が成就される為にてである。碌山のこれまで書き記して来た「彼等も亦人の子ならずや」、「人類の上に何等の差ぞ」、「神の前に何等の別ぞや」等からは、一種碌山の人道主義のみが、強調されがちである。しかし、この3月20日書簡には、碌山の十字架への集中が見られる。彼も我も神の前に等しい。それは、彼も我も神の前に等しく罪がある、ということである。禊によって洗い流される日本的罪ではない。原罪である。神の計画—人類の救済—が成就する為にて、キリストは十字架に死なれた。しかし、「人類の容易に之れを解する不能」と碌山は言う。人類が人類であるかぎり、人智では「肉の戦争を避くる不能」という。そして、キリストの「降し玉へる霊」による戦にいたっては忘れ去っている、と悲しんだ。

碌山は、日露戦争を通して戦争について考えた。碌山の言う「肉の戦争」と「霊の戦争」である。1905年（明治38年）7月18日付、井口宛書簡には、アメリカ在住の日本人留学生について、次のように書き送っている。「戦争は独り満州の野に限らず候。世界到る所之れ戦場、社会に家庭に、否自己の心の中に、殆ど分秒も絶ゆる事なきは之れ戦争に御座候。・・・彼等も遠く故山を離れ、勇敢なる戦争の途上にありと云へども、彼等の軍略は兎玉大将のそれの如く明確ならず、乃木大将のそれの如く勇敢なる能はず、幾多有為の青年紐育に或はシカゴに惨憺たる戦死をとげつゝある也。想ふに心の戦は剣の戦より惨憺也。」⁸¹⁾。

青雲の志しをたて留学して来た有能な青年達の中にも、異国にあって幾多の困難、誘惑を前に、行き詰ったのであろう。この戦いに、軍略の明確でない者、勇敢でない者たちが、留学という貴重な体験と時間とを無駄にし浪費する姿を、碌山は見た。ニューヨークに、シカゴに、日本人留学生の精神的屍は、累々と横たわった。光太郎の言った「紐育あたりによくごろごろしてゐた日本人のいはゆる浪人たちのやうにだらしの無い人間」のことである。碌山は、彼らのために悲しんだ。「心の戦は剣の戦より惨憺也」。目に見えない敵（誘惑者）との戦いは、目に見える敵との戦いより惨憺なり。順境が人を墮落させると信じた碌山であったが、逆境の時も、順境の時も、その背後に誘惑者が存在するのなら変りはない。キリストの「降し玉へる霊の剣」によって「霊の戦争」を戦うしかない。碌山は、この時も struggle しつづけていたのであった。

注

- (1) 仁科悖『碌山・32歳の生涯』,三省堂 1990年,199~200頁。
- (2) 笹村草家人『笹村草家人文集 上巻』,無名会刊行会 昭和55年,138頁。
- (3) 仁科悖『荻原碌山—その生の軌跡—』,柳沢書苑 昭和52年,256頁。
- (4) 林文雄『荻原守衛 忘れえぬ芸術家 上』,新日本出版社 1990年,25頁。
- (5) 一志開平「碌山芸術の根源にあるもの」,『碌山美術館報』,第10号 平成元年,2頁。
田中清光(文)・栗田貞夫(写真)『安曇野・碌山美術館』,クリエイティブセンター 1991年,89頁。
碌山読み物研究委員会『荻原碌山』,南安曇野教育会 昭和62年,5頁。等
- (6) 相馬黒光「碌山のことなど」(東京藝術大学石井教授研究室編『彫刻家 荻原碌山』,岡書院 昭和31年,23頁所収)。以下『彫刻家 荻原碌山』として引用する。
- (7) 戸張孤雁「有の儘」(荻原守衛他『彫刻真髓』博文館 明治44年,復刻版 碌山美術館 平成3年,232頁所収)。以下の『彫刻真髓』からの引用は,この復刻版による。
- (8) 戸張,前掲書,231頁。
- (9) 戸張,前掲書,232頁。
- (10) 戸張,前掲書,227~228頁。
- (11) 戸張,前掲書,232頁。
- (12) 戸張,前掲書,235頁。
- (13) 戸張,前掲書,230頁。
- (14) 戸張孤雁「荻原守衛君伝」,『彫刻真髓』,4頁。
- (15) 戸張,前掲書,5頁。
- (16) 戸張,前掲書,5頁。
- (17) 井口喜源治「碌山荻原守衛君」,『彫刻真髓』,190~191頁。
- (18) 井口,前掲書,191頁。
- (19) 杉井六郎(注解および編)・荻原守衛『碌山日記』,同朋舎出版 1980年,53頁。
- (20) 相馬黒光「碌山のことなど」,『彫刻家 荻原碌山』,17頁。
- (21) 荻原守衛「守衛の日誌」,『碌山美術館報』,第6号 昭和60年,2頁。(1950年3月17日,中村伝三郎が荻原家から借用筆録した碌山の日誌を,碌山美術館が書写したものである)。
- (22) 彼は,1893年フランスより帰国。外光表現を提唱して,若手画家に多大な影響を及ぼしていた。1896年,東京美術学校に洋画科が併置されると,初代教授となった。
- (23) 明治美術会を背景にもつ「不同舎」は,碌山が入塾した頃,本郷区駒込追分町九十七番地及駒込東片町六十五地,が住所であった。現在の都立向丘高等学校構内の一部にあったことになる。巢鴨の明治女学校からは約4キロの道程である。
- (24) 青山なを『明治女学校の研究』,慶應通信,昭和57年,153頁参照。
- (25) 井口喜源治「碌山荻原守衛君」,『彫刻真髓』,191頁参照。
- (26) 杉井(編)・荻原『碌山日記』,260頁参照。
- (27) 荻原守衛「書簡」,(碌山美術館企画編集『荻原守衛の人と芸術』,信濃毎日新聞社 昭和54年,206頁所収)。以下『荻原守衛の人と芸術』として引用する。
- (28) 仁科悖『荻原碌山—その生の軌跡—』,柳沢書苑,昭和52年 45頁参照。
- (29) 荻原守衛「書簡」,『荻原守衛の人と芸術』,206頁。
- (30) 高村光太郎「荻原守衛」,『詩洋』,第百輯記念號 昭和11年,41頁。
- (31) 井口喜源治「碌山荻原守衛君」,『彫刻真髓』,191頁。
- (32) 荻原守衛「書簡」,『荻原守衛の人と芸術』,229頁。
- (33) 荻原守衛「ロダンと埃及彫刻」,『彫刻真髓』,30頁。
- (34) 荻原守衛「守衛の日誌」,『碌山美術館報』,第6号 2頁。
- (35) 荻原,前掲書,2頁。

碌山の言葉“LOVE IS ART, STRUGGLE IS BEAUTY.”の考察（前編）

- (36) 萩原, 前掲書, 4頁参照。
- (37) 萩原守衛「書簡」, 『萩原守衛の人と芸術』, 237頁。
- (38) 萩原, 前掲書, 237頁。
- (39) 笹村草家人『笹村草家人文集 上巻』, 109頁。
- (40) 高村光太郎「萩原守衛」, 『彫刻家 萩原碌山』, 3～4頁。
- (41) 相馬黒光「碌山のことなど」, 『彫刻家 萩原碌山』, 34頁。
- (42) 相馬黒光『黙移』, 女性時代社, 昭和11年, 24頁。
- (43) 相馬, 前掲書, 12頁。
- (44) 相馬, 前掲書, 13頁。
- (45) 相馬黒光『穂高高原』, 女性時代社, 昭和19年, あとがき 2～3頁。
- (46) 相馬黒光『黙移』, 212頁。
- (47) 相馬, 前掲書, 213～214頁。
- (48) 笹村草家人「碌山攷」, 『彫刻家 萩原碌山』, 86頁。
- (49) 萩原守衛「書簡」, 『萩原守衛の人と芸術』, 243～244頁。
- (50) 教育時論「オブリヴキオン庵」, 『彫刻真髓』, 240頁。
- (51) 萩原守衛「書簡」, 『萩原守衛の人と芸術』, 270頁。
- (52) 萩原守衛「公設展覽會評」, 『彫刻真髓』, 120頁。
- (53) 萩原守衛「ロダンと埃及彫刻」, 『彫刻真髓』, 36頁。
- (54) 萩原守衛「予が見たる東西の彫刻」, 『彫刻真髓』, 51頁。
- (55) 萩原守衛「談話の一節」, 『彫刻真髓』, 59頁。
- (56) 萩原守衛「ロダンと埃及彫刻」, 『彫刻真髓』, 42頁。
- (57) 萩原守衛「談話の一節」, 『彫刻真髓』, 60頁。
- (58) 彼は, 1907年凸版会社の派遣留学生として, パリの Academie Julian に入学。そこで碌山と出会った。
- (59) 本多功「碌山の追憶」, 『彫刻家 萩原碌山』, 38頁。
- (60) 相馬黒光「碌山のことなど」, 『彫刻家 萩原碌山』, 33～34頁。
- (61) 萩原守衛「談話の一節」, 『彫刻真髓』, 60頁。
- (62) 萩原 前掲書, 60頁。
- (63) 萩原守衛「公設展覽會評」, 『彫刻真髓』, 122頁。
- (64) 犀水生「故萩原守衛君追悼記」, 『彫刻真髓』, 267頁。
- (65) 中山公男・中森義宗『美術史〈西洋〉』, 近藤出版, 1987年, 1頁。
- (66) 中山・中森, 前掲書, 1頁。
- (67) 中山・中森, 前掲書, 1頁。
- (68) 菊地一雄『ロダン』, 中央公論美術出版, 昭和60年, 132頁。
- (69) 北野進『安曇と碌山』, 安曇野刊・信濃教育, 1982年, 38頁。
- (70) 萩原守衛「書簡」, 『萩原守衛の人と芸術』, 267頁。
- (71) 萩原, 前掲書, 267頁。
- (72) 萩原, 前掲書, 268頁。
- (73) 萩原, 前掲書, 193頁参照。
- (74) 萩原, 前掲書, 270頁。
- (75) 萩原守衛「蔵書の書き入れ文」, 『萩原守衛の人と芸術』, 295頁。
- (76) 萩原, 前掲書, 296頁。
- (77) 萩原守衛「書簡」, 『萩原守衛の人と芸術』, 271頁。
- (78) 萩原, 前掲書, 271頁。
- (79) 萩原, 前掲書, 272頁。
- (80) マタイ26:36～27:54, マルコ14:32～15:39, ルカ22:39～23:47, ヨハネ18:18～19:30。

碌山の言葉“LOVE IS ART, STRUGGLE IS BEAUTY.”の考察（前編）

- (81) 荻原守衛「書簡」, 『荻原守衛の人と芸術』, 273頁。